

「福音通信」 創刊号

—— 発刊の辞 ——

1973年 1月3日

奥田昌道

(一)

われわれの集会は、今年で第二年目を迎える。1972年1月2日(日)午後二時より妻幸子と私とただ二人で新年祈禱会をもち、これを第一回集会(あるいは、実質的には準備祈禱会)としてスタートしたこの集会は、それ以来、日曜日毎、特別集会などの場合を除いては一回も欠かすことなく一年間続けられてきたことに、主キリストの御守りと力ある御導きを思い感謝の念新たなるをおぼえる。

水曜日晚も、ほとんど欠かさず祈禱会をやってきた。小池辰雄先生の御講筵テープを聴くことが祈禱会の特色をなし、鴻大なる福音の世界へ、また、深い真理の中へと我々は導かれ、みたまの光を浴び、みたまの炎に燃やされて祈ったことであつた。私は一回一回の集会に、その時その時の全身全霊を投じての気合で、われらの主キリストの胸をお借りして、それに体当たりし、鍛えていただくべく、やってきた。日曜集会といつても、私自身の身の事情から、ほとんど準備らしい準備もせずに、集会にのぞむことが多かった。私自身が主様の御前にひれ伏して、主様からじかじかに新たに生命をいただくこと、みたまの活力をいただくこと、それを願つて集会をした。「曠野の愛」誌の諸講筵や、「曠愛新書」の先生の文章、そしてまた、ふるく「愛泉」誌に掲載されている生き生きとした先生の御講筵などを道しるべとしつつ、旧新約の世界に旅をした。その間、私は集会のために、一文をも草することとはなかった。ただ、常々、小池先生の諸著書を熟読玩味するようにと集会員にすすめてきた。私が文章を書くのは時期尚早でもあるし、不要である。聖書と小池先生の諸著書があれば十分である。そのように考えてきたからである。そして、ここに、一年が過ぎた。

(二)

一年の経験にかんがみると、いろいろな事情に制約されて、集会への出席が規則的というわけにいかない人が多い。そういう人にとつては、とかく集会と集会との連続性が寸断され、したがって、集会での私の話の内容に関しても、前後のつながりが切断されて、よろしくないことがままある。そういうことを考えると、何らか、そういう集会員の信仰の歩みの一助に、集会の記録なり、講筵内容のエッセンスを書きとめておくことも意義あることではないかと考えるに至った。そこで、どんな内容になるか、いつまで続くか、



見当はつかないが、試みてみようと思う。広くは対外的に公表するような筋合いのものではない。もっぱら右のような見地から、集会員の歩みへの助けとなるべく、また、併せて、私自身の歩みのメモとして、書いてみたいと思うまでである。集会員諸兄弟は祈りをもって、これを支えられんことを！ また、何ものかプラスとなるものを汲みとられんことを。

*

まず神の国と神の義を！

1973年1月7日

1月1日(月) 午後2時半から新年集会をもつ。年頭に賜りたる聖言は、マタイ伝6章19
〜34節である。

「なんじら己がために財宝を地に積むな。……なんじら己がために財宝を天に
積み。……なんじの財宝のある所には、なんじの心もあるべし。……人は二
人の主に兼ね事^{つか}うることを能わず。……汝ら神と富とに兼ね事^{つか}うることを能わず。」

まず、われらの心の眼のつけどころをはつきりさせよう。神を第一とし、天を第一として、
神人、天人として生き抜こうではないか。

「この故に我なんじらに告ぐ、何を食^{くら}い、何を飲^のまん^くと生命をことを思い煩い、
何を著^きんと体^{からだ}のことを思い煩うな。……是みな異邦人の切に求むる所なり。
汝らの天の父は凡^{すべ}てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。まず神の
国と神の義とを求めよ、然らば凡^{すべ}てこれらの物は汝らに加えられるべし。この
故に、明日^{あす}のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦
労は一日にて足れり。」

何と主イエスの思いやり深きみ言葉ではないか。御霊に導かれ、荒野にてサタン(悪魔)
と一騎打なされた主である。四十日四十夜、断食なさつて飢餓は生命の極限まで達したそ
の時に、サタンに対して断然と、

「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出する凡^{いっさい}ての言^{ことば}に由る」

との旧約聖書の聖句を引いて神一切の生き方を示された主である。この主が、ただ一言、

「汝ら、神の国と神の義をひたすら求めよ」

と言ひ放たれて、あとは何もおっしゃらなくても、我らは、「然り、アーメン！」とお答え
して、この聖言に敢然と提身すべきである。あわれみ深き主は、生命のこと、体のことに
関わるわれらの思い煩いに対して深い同情を寄せ給い、実力の裏付けある御言^{みことば}でもって、
われらがそれらから解放されて、ひたすら聖国を求め得べきこと、まず、神の国と神の義
を求めることが、われらの人生にとりて、日々の営みにおいて、第一義のものなることを
懇ろにさとし給うたのである。このような深い思いやりに対して、我々は、全身でもって、



「アーメン、主よ、我らをしてこの悲願に生かしめ給え！」
と祈らざるをえないのだ。

「神の国と神の義を！」

とは、極限すれば「キリストを！」ということ。

「主様御自身を求めよ」

ということだ。

「我を喰い、我を飲め」（ヨハネ伝6章）

とのキリストの言葉を実践してゆくことだ。旧約の預言者たちは、アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤ、ことごとく

「主なる汝らの神に帰れ」

と叫んだ。

「生命の源泉なる神御自身のふところへ帰れよ！」

と叫んだ。その場を外して、何がどうなろうとも、それは空虚なものだ。たとえば栄えりとも、それは虚栄だ、と。神一切、神第一の生き方をなさったイエスは、律法の本義を、

「汝ら、心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして主なる神を愛せよ」

と、

「己れの如く汝の隣人を愛せよ」

に凝集せしめ給うた。

神第一、「まず主キリストを！」の生活の具体的あらわれとして、私は、日曜日ごとの集会（聖日集会）と、水曜日の夜の祈祷会を大切にしたいと思う。アモス書に次のような言葉がある。

「主エホバ言いたもう。視よ、日至らんとす。その時、我、飢饉を此国におくらん。これはパンに乏しきにあらず、水に渴くにあらず、エホバの言を聴くことの飢饉なり。彼らは海より海とさまよい歩き、北より東とはせまわりてエホバの言を求めん。されどこれを得ざるべし。その日には美しきおとめも若き男もともに渴きのために絶えいらん。」

現代は物質的にはまことに豊かである。パンも水もある。けれども、我らが日常耳にする言葉、音にきく音楽、目で見える文字またはテレビの画面、そのいずくに神の言があるか。目に耳に、いや応なしに入り来たり、飛び来たるおびただしい情報の洪水に、われらは吞みつくされそうではないか。押し流されそうではないか。しかも、その中のどこに神の言、生命の言があるというのか。無い！我らは、意識的に探し求め、魂のスイッチを神の霊波に合わせるようにしないと、自然には決して聞こえてこない。我々の魂の扉を開き、神・キリストに向かって魂を傾けてその語りかけをひたすら聴く態勢を絶対に必要とする。そのために備えられたかけがえのない場が、集会であり祈祷会である。背神、反キリストの



世の潮流の中で、画然と密室をつくり、隠れたるに在す隠れたる主キリストにじかじかに相まみえ、この方の聖言みことばのみに全身全霊を傾けつくすことのできる場なのである。主イエスも、常に、ひとり寂しき処に行つて、父なる神の懷の中でひたすら父神に祈りをされた。われらもまた、このような、主キリスト御自身との交わりの場を必要とする。

イザヤ書56章には、当時のユダヤ教の教義からすれば、およそ救いには縁のない異邦人や宦官かんがんに向かつて、肉のイスラエルにあらず、霊のイスラエルこそが神の民なのだと呼びかけ、新しい祝福が約束されている。曰くいわ。

「わが安息日を守り、わが喜ぶことを選んで、わが契約を堅く守る宦官には、わが家のうちで、わが垣のうちに、むすこにも娘にもまさる記念のしるしと名を与え、絶えることのない、とこしえの名を与える。また、主に連なり、主に仕え、主の名を愛し、そのしもべとなり、すべて安息日を守って、これを汚さず、わが契約を堅く守る異邦人は——わたしはこれをわが聖なる山にこさせ、わが祈の家のうちで楽しませる。彼らの燔祭と犠牲とは、わが祭壇の上に受けいられる。わが家はすべての民の祈の家となえられるからである。」

また、58章13〜14節には、

「もし安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず、むなしい言葉を語らないならば、その時あなたは主によって喜びを得、わたしは、あなたに地の高い所を乗り通らせ、あなたの先祖ヤコブの嗣業しぎやうをもつて、あなたを養う。」

と。この預言の言葉を読むとき、ここに深い神の熱愛のひびきを感じ得せざるをえない。安息日はいわゆる「律法」ではない。熱愛の神が、何とか、我々を祝福し、神の豊けき賜物、その至福の中に我々を入れ、守り、あきたらわせんとて、我々が神ならざるものに心惹かれ、心を寄せることなきようにと配慮したもうであるのを見る。私もまた、いわゆる律法として聖日を守るものではないし、また、人にそれを求めるものではない。どこまでも福音の角度から、われらの人生の旅路の中で、日々の営みの中で、この聖日集会を、主がわれらに賜ったかけがえのない大切な場とし、大切な時として、これを尊びたいとねがうものである。ユダヤ人との安息日間答において、

「安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず。然れば人の子（イエス）は安息日にも主たるなり」

と答えられた主イエスの自由自在にして、ひたすらに神の愛の中に生きておられたそのあり方を思わないではいられない。

ともあれ、先のイザヤ書58章にあるように、聖日は我らにとり、日常のあかを洗い流し



日常性から脱却してキリストの霊の深みへと漕ぎ出だし、また、高くみたまの天界へと飛翔させていただくよろこびの日である。一週間の前進の原動力をいただく日である。いずこの場所であろうとも、友よ、祈り心で聖日を過ごそうではないか！ 君が働きの場にあるときも、私たちは祈っている。その祈りを覚えてくれたまえ。そして、休息の合間に、黙祷のひと時をもってくれたまえ。祈りはかけめぐる。どんなに離れていても、みたまの祈りにおいて、われらは堅く結ばれ、響き合って生きたいものだ。われらは主キリストの荷にないの愛をもつて互に荷いあつて生きよう。遠く離れて独りある兄弟よ、祈りを共にしよう。われらの集会の日時をおぼえて、そのとき、その時刻に一つなる祈りを捧げよう。君は独り孤独で在るのではないのだ。In geistiger Verbundenheit〔霊的な結合、愛情〕——みたまにありて、魂は結ばれて、同じ天国に生きるのだよ。病床の友よ、主にありて強く雄々しくあらんことを！

「かれこそ汝のすべてのふぎゆるす者、汝のすべての病を癒す者！」（詩103篇）

「どんなに病が長びきましようとも、消長がありましようとも、そんなことを超克して、詩篇103篇のこの3節を本当に現実たましいに自分の靈魂の奥底で受けとるか、受けとらないかが、最も重大な問題なんです。わがすべての不義は赦されてある！わがすべての病は癒されてある！ 根源的に癒されてある」（小池辰雄先生「絶対恩寵」より）

主にある友よ、それぞれの賜りたる場で、今、現におかれているそのただ中で、主に呼ばわり、主の生命を身一杯にいただいて、力強く前進しよう。

ハレルヤ、讚美、栄光、聖名にあれ！



「福音通信」第2号——太田彼得さんを天に送りて——

1973年1月21日

奥田昌道

(一)

太田彼得先生——私は信愛の気持ちをこめて、太田彼得さんと呼ばせていただく——
が随分お悪いと聞いたのは、今年1月10日(水)の祈禱会の折、N姉からであった。あんなにもお元気だった太田さんを知っている私としては、昨年病に臥されてからも、すぐに御快癒になるにちがいないと思っていたし、また、いずれ近々お見舞いにもうかがいたいと思っていたこととて、N姉の報告は私を驚かしたし、信じがたいことであった。1月14日(日)午後、私は来洛中のH姉と守口市滝井の関西医大病院に太田さんを訪ねた。痛々しいまでにやつれ、やせ細られた太田さんを見て、当初、これがあの太田さんだとは信じられないほどだった。左の腕に点滴をし、酸素吸入をつづけておられた。それでも、息は苦しそうだ。その苦しい息の中から、

「わたしは、主様のお苦しみにあずかせていただいているのです」

とおっしゃった。私は太田さんの右の手をにぎりしめつつ、一心に主キリストに祈った。願わくは、主キリストのみたまのいのちが太田さんを貫いて、病に勝たしめてくださるよう、に、再び太田さんを福音の戦士として、伝道の前線に立たしめてくださるようにと、切に祈った。H姉は看護婦さんらしくこまごましたことによく気を配られて、少しでも太田さんが楽であるようにと助けておられた。ごく短期間で病室を辞し、心を痛めつつ帰路についた。翌1月15日(月)、成人の日の休日、夕方に私は再び病室に伺った。前日よりは生氣を取り戻し、明るい表情でいらっしゃった。目に涙を浮かべてよろこんでくださった。そして、はつきりとした口調で、

「わたしの使命は終わりました。わたしは使命を果たし終えました」

とおっしゃった。この言葉が、私が太田さんから聴いた最後の言葉となった。前日と同じように祈りを捧げて病室を辞去した。そして一日おいて1月17日(水)、午前11時12分、太田彼得さんは地上の体を脱ぎすてて聖霊の御翼に乗って、天のすみか、主の御許へと凱旋なさったのであった。ああ、あの時が最後の会見の時になろうとは！ もっと長くそこにいたいという心を押さえて、お身体にさわってはと、早々と病室を辞したのであった。しかしながら、考えなおしてみれば、主が私に二度までも相会う機会を与えてくださった深い御あわれみの御旨に、私は深く感謝するものである。

京都と大阪というごく近くにおりながら、私の身の諸事情から、お訪ねすることもままならず、京都の地にて祈るのみであった。けれども、体は離れていても、心において、



霊において、ほんとうに一つに結ばれていたまことの友こそ、太田彼得さんであった。地上での戦いを終えられ、天上にのぼられた太田さん、主キリストの愛の御ふところの中にて、しばし安らげく憩われんことを！

(一)

太田彼得先生の信仰告白は、その月刊福音誌「泉」に溢れている。この福音誌をもって太田さんは、集会的偽善や似非キリスト教と徹底的に戦い、幼な子の心をもってキリストの福音をその全き姿において信受し、幾多の魂をキリストへと導かれたのであった。太田さんは、偽善を嫌う真正直な、いつわりなき魂の人であった。そして、恩寵無限のあわれみの主にひたすらすがって生きる福音の証者であった。徹底的に十字架の主にゆるされ、徹底的に人の罪をおおひになつてゆく深い愛の人であった。自分を義人だとはつゆ思っていない砕けの魂であった。「泉」第66号（1972年11月号）の「基督の御眼」という文章に、そしてまた、私の太田さん宛の私信をやむにやまれず直ちに「泉」（同号）に掲載されたそのお心に、それがよく現れている。そして、太田先生の絶筆ともいうべき「泉」第68号（1973年正月号）の「後記」の短文がよくその心を表している。曰く、

「さて私は、詩篇第1篇（選民的な聖徒型の幸福）に破れてから詩篇第32篇（罪人や異邦人があずかる受福型の幸福）に移ったが、今年は「その力が神にあり、その心がシオンの大路にある」という詩篇第84篇（無私無力の幸福）に移されている。そして、涙の谷は「おおくの泉ある処」と変わるであろう」

と。「泉」誌の刊行者が「泉」の聖句をもつてその絶筆となつたことに不思議な思いがする。それはともかく、太田さんは齡70を越えていながら、その心のみずみずしさは、我々壮年の者、また青年の者と少しも変わらなかつた。真理を求め、真理に生き、追求無限やまさるところがあつた。右に紹介したような「砕けの魂」のさいわいを太田さんは、小池辰雄先生から学ばれたと私は思う。太田さんをしてあれほどまでも、小池先生に師事せしめたもの、小池先生を敬慕して終始かわることがなかつた秘密は、小池先生の告白し、唱道なさっている「福音」でなければ生きられないという太田さんの魂の姿であろう。実はその点において私は太田さんと全く肝胆相照らし、共感共鳴する間柄であることを自覚するものである。太田さんは、私ごとき若輩を実に信愛の眼をもつて信頼し、励まし、建てあげていくくださった。そのことを思うと胸が熱くなる。今ここに太田さんからいただいた書信のいくつかをしるし、太田さんを偲ぶとともに、主の聖名に栄光の帰せられんことを切に願うものである。

昨年昭和47年にいただいたものの中から、抜粋して揚げさせていただく。



1972年1月11日付（葉書）

「……ことはエペソ書6章の神の武具を身につけてサタンと闘わねばならぬと存じます。先生の上にまた御奥様御家族全体に天の祝福が豊かでありますように。『力を受けて殉教者となるべし』神の愛が注がれ殉教の炎が注がれ赦しと愛が先生にも私にも豊かに注がれて主様のみさかえとなりますように祈ります。」

1972年8月22日付（葉書）

「御名を讃えて。いよいよ伊豆特集〔私注——小池先生の夏期福音特別集会、伊豆松崎にて〕ですね。私は参加出来ませんでしたので残念に思っています。主様の何かのお取り計らいであろうかと存じ、み手にゆだねて安んじます。奥田先生から小池先生に何卒よろしく御伝声のほどお願い申し上げます。謙遜の人徳ではなく、①「砕け」であること、人間の智でなく、②「突破」であること。そして、み旨が天に成るように地になる、③「包摂」であること。之らの御霊の業が一同の者に欠けなく成し遂げられるようにひたすら祈り上げます。当方からN姉が参加します。彼女の上にみわがが成されるよう御助祷くださいまし……。では行つていらつしやいまし。主のお守りを祈り上げます。」

1972年9月27日夜 太田生

「本日、「ハレルヤ」誌29号〔小池辰雄主筆〕落掌。みたまのお働きにより全文躍動。私の体にも癒しの力がみなぎります。N姉から聞いたことにまさって松崎集会の有様が手に取るようにわかり嬉しかったです。」

1972年10月5日夜 太田生

「先日は御丁寧なお言葉を以てお便りを頂き恐縮しております。一年中の文通を一度に頂いたようで御座います。嬉しくて嬉しくて厚く御礼申し上げます。「ハレルヤ」誌29号10部とその他の27号や28号を沢山にお送りいただきました事を感謝いたします。ことに「愛泉」15号〔注——「無学の凡人」使徒行伝4章1～31節、小池辰雄、1957年7月28日清瀬の国立東京療養所での講述録音によるもの〕は、小池先生の15年前の講述の事とてなかなか得難いものでした。愛泉を読んでいるうちに御霊は私に「天」ということを非常に明瞭に啓示してくださいました。小池先生が天の字を好んでお名前につけられることもよくわかる気がいたします。ステパノに開かれた天、黙示録に記されたところの地に降ってくる天、パウロの告白している国籍の天、主イエス様がみ父を呼び給うたときの天、神の御霊の充満した栄光の世界、唯一にして絶対完全なる実在世界、聖なる聖なる世界でした。心

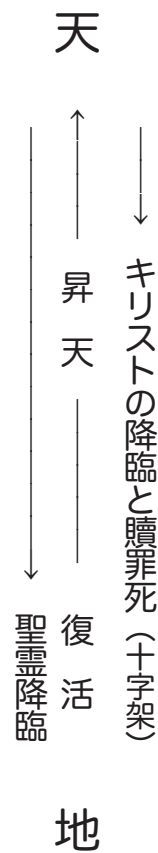


砕かれた者にのみこの天（霊界）が宿ります（イザヤ書57章15節）。私が聖書を啓か
れたのは先ず「夕あり朝あり」創世記1章でした。今までこの句がわかりません
でした。暗があつて光明があること、苦難があつて栄光があること、大地も人間
の心も新創造はキリストの十字架から始まることを知りました。「夕あり朝あり」、
贖罪ありそして復活がありました。次に創世記28章12節の

「時に彼は夢を見た。一つのはじごが地の上に立っていて、その頂きは天に達

し神の使たちがそれを上り下りしているのを見た」（ベテルの夢）

右のうちの「上り下り」という句が今までわかりませんでした。ところが「天」
の啓示を受けてわかりました。



ヤコブの夢（祝福）は復活で天に昇り、聖霊の臨在が地に降ります。キリストと共に十字架されたクリスチャンの生命は復活にはじまり、聖霊のバプテスマの体験で生かされます（わがうちに主が生きたもうのでした）。善悪とか清濁とかの相対を越えて天から降ったみたまに生きる者は幸いでした。それは小池先生が体験し、奥田先生が体験し、私も体験しているところのものでありました。ハレルヤ。

こんなことを書いていますと、いくら紙があつても足りません。またお会いする機会が与えられましたら語り合いたいものです（マラキ3章16節）。

11月の初めに小池先生がおいでになられるとき、その前に日程や御計画をお知らせください。N姉その他に知らせてやりたいと思います。御平安を祈りつつ。」

1972年11月7日（葉書）

「ハレルヤ。京都集会は勝利であつたとの事、N姉やO兄から承りお喜び申し上げます。お宅での夜の集会の帰途、守口組数名が川原に座つて祈祷会をもつたといつていました。小池先生に始めて加わつた青年達がどんなに恵まれたか御想像ください。みたまの灯火をともし隠された本願（御旨）を照らして進みましょう。」

〔私注——太田さんは10月18日、三度目の肺炎に罹り、それ以来食欲を欠き床に寝たきりだったとのこと。それで上記の京都集会にも出席できなかったこと。それを私達に知らせて心配かけてはと思つて秘しておられたことを後に知った。病臥の身でありながら、何と若い信仰の友らをよく導き、よくそのために配慮なさつていたことか。その人達が恵まれ前進してくことを我が事のようによろこんでおられた太田さん！ この太田先生の祈りを後に遺された者達は決して無にしないであろう〕

私が最後にいただいたお便りは、12月19日付、奥様の代筆によるものであつた。

「御名を崇めつつ」



私事14日(木) 門真市の病院に入りました。先生の御多忙の事は万々承知していますし、肉体は離れていても霊は常に一つにいますから、遠隔祈禱を御願ひ致します。

万が一にも先生との霊の断絶のなきように御願ひ致します。(代筆)
12月19日

「主にある小さき僕」

(三)

太田彼得さんは、1973年1月17日、73才の生涯を閉じ、地上を去って逝かれた。太田さんの生涯、その言葉、その行為、それらは太田さんの死とともに消え去るものであるか。断じて然らず。太田さんも、その生涯も、その言葉も、愛の行為も、断じて滅びはしない。今もなお生きている。見ゆる姿においては、我々から取り去られた。しかし、太田さんは決して死にはしない。死んでも死なない永遠の生命を、たまにあつて、既にいただいております。太田さんは、不滅の生命の人である。

「我は復活^{よみがえり}なり、生命^{いのち}なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を

信ずる者は、永遠に死なざるべし」(ヨハネ伝11章25節)

然り、イエスを信ずる者、具体的には、その贖罪にあずかり、いのちのみたまをいただいたものは絶対に死なない。目に見ゆる生死は、現象的・相対的生死にすぎない。

„Alles Vergängliche ist nur ein Gleichnis.“

「すべてうつろいゆくものは影像にすぎない」

とは、ゲーテ『ファウスト』の詩の中の言葉であるが(「愛泉」第6号、小池先生「真の葡萄樹」参照)

「現世において私たちが見、聞き、触れるこの移りゆくはかなきものは、影像、似姿にすぎない」

という。けれども、このうつろいゆく我々の中に、移ろいゆかざるキリストの生命が、みたまとなつて宿り給うとき、我らは移ろいゆかざる永遠なる質を中にいただく永遠不滅者とされていくのである。そのとき、我らの存在も、生涯も、行為も、実はもはや空しきものはかなきものではなくなつてしまつているのである。すぎゆく、影像のようなものでありながら、すぎゆかざる永遠の質と光を帯びたのである。これが福音だ。

「キリストという永遠の生命が、影の如き私たちの中に形をとろうとしておられるのです。本体の核をうちに宿す「似姿」としようというのがキリストの御本願であります。」(小池先生、「愛泉」前掲)

今より後は天界にあつて、キリストの御そばに在り、その御光に照らされつつ、天の万軍と共に、いよいよ主の御用の為に用いられ働き給はんことを!

太田さん、再び相会う日まで天地相応えて聖名のために戦わん。



「福音通信」 第3号 (1973年2月)

1973年1月28日(日) 夜

奥田昌道

(一)

今朝の京都地方は珍しく雪が積もり、山々も雪の薄化粧に趣きがありました。そして、時折、激しく吹雪く雪模様のお天気でした。雪深い信州にいらっしゃる姉妹たち、山口にある兄弟を思いつつ、集会をいたしました。地方にありて集会を共にすることのできない兄弟たち、事情あつて集会に出席できなかった方々と、これから一緒に、この誌上を通して、祈りの集会をするつもりで、筆をとりました。日曜日の集会ごと、水曜日の祈会ごとに、あなた方のことを思つて、祈つております。

さて、今朝の集会でN君の司会、感話を聴きながら、私は、東の山脈をじつとみていました(これは今朝にかぎらず、いつもそうです。私は東の方に向いて坐しているものですから、山がいつも美しく見えるのです。詩篇121篇の「われ山に向かいて目をあぐ」です)。山の上にかかっている雲がぐんぐん南へ流されていくのです。強い北風が吹いているのだなあと見ていました。と、吹雪はいつのまにかやんで、太陽が照りはじめました。室内からみえていますと、まるで北風が吹雪もろとも追つ払つて、スカッとした空間へ皆さんと太陽が照っている。そんな感じでした。風と太陽、風は息、気、霊。太陽は光、熱、愛。いずれも聖霊に通じますが、聖霊の二つの現れ方といつてもよい。風は動的で激しく、力をもっている。陽光は静かで、おだやかで、暖かく人を包み温める。この風と光、光と風が今朝は一体となつて、力を合わせて、すばらしく澄みきった景色を展開してくれました。無色透明の空間、目には見えねども、そこには空氣が、然り、気が充満している。そして、万物を包んでいる、生かしている。

「神は万物に超在し、主は万象に貫在し、聖霊は万人に内住し給う」(エペソ書

4章6節)(これは1968年夏期福音特別集會、於鹿沢、の聖句です)

実に遍照遍在の充満の主、主のみたまを体感いたします。この主によつて我らは生かされてあるのです。

「わたしがお前の中に入っているのちとならなければ、お前には、いのちはないよ。ね、そうだろう。わたしはお前の中にどうしても宿るからね。宿りたいからね。」

これが主の愛であり、御本願であります。——どうぞ、小池先生の曠愛新書第2号の「桑の木によじのぼる」を読みかえしてください。どうしても主様を一目見たいという一念のザアカイと、その悲願に対して、



「今日、わたしはお前の家にどうしても泊まるからね」

といきなりおつしやったイエスの御本願をもつてする応答、悲願以上に応えてくださる御本願の迫り。これに貫かれ、圧倒され、荷^{にな}われてこそ、私達は「在る」ことができるのです。そうでなければ、私達はほんとうには生きてやしない。生の実感がない。内に光がない。どうぞ、もし、もはややしたものがあつたら、自分もろとも、北風(十字架)にぶつ飛ばしていただいて、陽光(聖霊の光)を身一杯に浴びましょう。十字架の主に投げかければ、主は、よしきたと荷いあげてくださる。どうぞ、今、全存在でもって全身で「主様!」と叫んでください。ハレルヤ。

(一)

聖書朗読では、N君がマタイ伝27章32節から56節まで読んでくれました(聖書朗読の箇所は、私が指示するのではなく、いつも司会者が選んで読んでくださるのです。私は集会ごとに、今日はどこが飛び出すかと楽しみにしているのです。そして、いつもめぐまれます)。どうぞ、右の箇所を今、お聞きになつて読んでみてください。……さて、神様の聖旨にひたすら従つて、十字架を負い抜きたもうたイエスさま、

「苦味(鎮痛剤、麻酔剤)を混ぜた葡萄酒を飲ませんとしたるに、嘗^なめて、飲まんとし給わず」

十字架上の肉体の苦痛をそっくりそのまま味わい尽くされたイエスさま——神の御旨なるがゆえに、御旨に従いきつて、「死に至るまで、十字架の死に至るまで」全うし給うた義人イエス・キリストの御姿(義とは聖意に従いきることをいう)。このイエスさまの姿に対するに「彼ら」の方は一体どうだ。

「彼ら、イエスを十字架につけてのち、くじをひきて其の衣をわかし、且つそこに坐して、イエスを守る」

衣の分どり合戦をやつて見物している、ということです。全く「彼らの思いは地のこと」(ピリピ書3章19節)であります。

「往來の者どもイエスをそしり、首を振りていう『宮を毀ちて三日のうちに建つる者よ、もし神の子ならば己を救え。十字架より下りよ』。祭司長らも、また同じく学者・長老らとともに嘲弄して言う『……いま十字架より下りよかし、然らば我ら彼を信ぜん』」

こういう傲慢な傍觀者の態度の人間は、たとえ、どんな御業を見ても、信じはしない。信ずるとはひれ伏すことだから。イエスさまの前に、足下に自分を投げ出して、ひれ伏すことだから。彼らは、その心は、神さまよりも偉いんだから。傍觀者のイエスを見くだし、

「よし、俺がひとつ見極めてやろう。イエスという奴が俺の試験(テスト)に合格したら、まあ信じてやつてもよい」



こういう態度なのです。世にインテリと称し、キリスト教を論評し、宗教論を得々と語る御連中の中に、なんとこういう輩が多いことか。どんなに学があるうと、博識であろうと、そんな輩の論議に耳を貸したもうなかれ、相手にしないがいい。愛する兄弟姉妹たちよ、あなた方はひたむきに、あなた方の賜りたる信の大道を歩み抜きなさい。

もう一度、祭司長らの言をみてみましょう。曰く、

『彼は神に依り頼めり。神かれを愛しまば、今、救い給うべし。』
『我は神の子なり』と云えり」

彼らはイエスさまのひたむきな生きざまをまのあたり見、知つていながら、今、テストしようとしているのです。こういうふうには傍観者的に、第三者的にものごとを見極めようとするような態度に対しては、神の国の扉は絶対に開かれはしない。信仰の事態は、「信」の世界は、こういう知的な客観主義ではないのです。そうではなくて、キリストの懐の中への投身です。「主様」と呼びかけ、主様にいだかれ、その中で展開せしめられてゆく世界です。主様との結びつきという主体的関わりを必要とするのです。

—— 十字架 恵み ——

キリスト

↑ 祈り ——

我

主様の中に投げ身して祈るとき、主はわれらの霊眼を開いてくださるのです。

「人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず、神の国に入ることあらわらず」

「あらたに」は「上より」であり、霊眼開かるることあります。

パウロはダマスコ途上にて白昼、太陽の光よりもものすごい、復活のキリストの白光を浴びて、いや、この白光に打たれて（キリストの霊撃です）、地に倒れ伏し、目が見えなくなりました。

「サウロ（パウロの旧名）、地より起きて目をあけたれども何も見えざれば、人

その手をひきてダマスコに導きゆきしに、三日の間、見えず、また飲食せざ

りき」（使徒行伝9章1～9節）

そして、みたまの人、アナニヤの按手あんしゅの祈りを通して、

「直ちに彼の目よりうろこのごときもの落ちて見ることを得た」

のでした。霊眼が開かれたのでした。実にパウロにおける死（三日間の暗闇）と復活（聖霊のバプテスマによる新生）でありました。

さきほど、傍観者はダメだといいましたが、何故、傍観者でいられるかというと、その人はキリストを必要とはしていないからです（ほんとうは万人がキリストの救いを、キリストを必要としているのですけれども）。私にとつては、主キリストは私の生存の土台であります。



キリストの十字架のあがないこそは、わが生存の要求であります。そのことを私は、「ハレルヤ」誌29号に関連して、太田彼得さんに書き送ったことがあります。その手紙を太田さんが『泉』誌66号に載せられたので、幾度も読みかえすことができます。感謝しています。そして、読みかえすごとに、みずから感激を覚えるのです。『泉』誌をお持ちでない方もいらつしやるでしょうから、右に引きましよう。

《小池先生の「地にも書くイエス」(上)にキリストの徹底的な、そして絶対的な赦しと憐れみの福音のひびき、その犯すべからざる厳しさを感得し、実に嬉しいです。さばきといけにえを排し、赦しと憐れみを好みたもうたイエスが、みずからは審きに服し、いけにえとなつてくださったという、この徹底的なあがないの愛の前に、全身涙のみであります。そして、小池先生が

「義しいとか、潔いとか、立派だとか、相対的な人間の価値を問題にしている人達とは、私は本質的に関わりがない。キリストにあがなわれた私は、あがないを必要としない人達とは本質的に関わりがない」

と云われたお言葉に、前端的にアーメンを叫びます。よくぞ言い切ってください！私はこれでないときれいな人間なのです。このような絶対的な赦し、憐憫、贖いと、十字架の根源現実だけが私の立つ場です。そこに身を置いていた時だけ私は会衆の前で語ることができます。この場がぼやけると私は忽ち苦しくなり、語ることをやめて逃げ出したいになってしまうのです。小池先生を通して啓かれた、かかる赦しの福音は実に私の存在の要求でありました。私が生きてゆく限り絶対に必要なのです。この福音にしてはじめて私は生かされ、感涙にむせぶ事ができるのです。そして有難くて、勿体なくて仕方がないのです。私という人間を根本的に改造し、私の霊を天国につなぎ、御霊なる天国の現実をわが胸のうちに宿らせてくださるもの、その愛に生き抜かせてくださるものは右のような福音のみであります。私は今、この手紙をしるしながら涙し、全身これ感謝、^{はらわた}腸の底よりハレルヤーと聖名を讃美しています。》

(三)

聖書講筵はマルコ伝4章、種蒔きの譬話^{たとえ}です。

「聴け、視よ、種まく者、まかんとて出づ。まぐとき、路の傍らに落ちし種あり、鳥きたりてついばむ。土うすき礫^{いし}地に落ちし種あり、土深からぬによりて、速^{すみ}やかに萌え出でたれど、日出でてやけ、根なき故に枯る。茨の中に落ちし種あり、茨そだち塞^{ふさ}ぎたれば、実を結ばず。良き地に落ちし種あり、生え出でて茂り、実を結ぶこと、三十倍、六十倍、百倍せり。……聴く耳ある者は聴くべし。」

1973年2月11日(日) 夜



この譬話の意は、

「まぐ者は御言をまくなり。御言のまかれて路の傍らにありとは、斯る人をいう。即ち、聞くとき、直ちにサタン来りて、そのまかれたる御言を奪うなり。まかれて磔地にありとは斯る人をいう。即ち、御言をききて直ちに喜び受くれども、その中に根なければ、ただ暫し保つのみ。御言のために患難また迫害にあう時は、直ちにつまずくなり。また、まかれて茨の中にありとは、…御言をきけど、世の心労、財貨の惑い、さまざまの慾いりきたり、御言を塞ぐによりて、遂に実らざるなり。まかれて良き地にありとは…御言を聴きて受け、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶなり。」

これがイエス御自身による註解です。

人が神の言に対するのに、四つの型が示されているようです。

(1) 路傍型——全然、御言を受けつけない。

(2) 磔地型——簡単に受けいれるが、また簡単に信仰を放棄してしまう。御言ゆえの、信仰ゆえの患難、迫害はつきものです。

「恵福なるかな、義のために責められたる者。天国はその人のものなり。我がために、人なんじらを罵り、また責め、いつわりてさまざまの悪しきことを言うときは、汝ら恵福なり。喜び喜べ、天にて汝らの報いは大いなり。汝らより前にありし預言者たちをも、かく責めたりき」(マタイ5・10・12)

「世もし汝らを憎まば、汝らより先に我を憎みたることを知れ。汝らもし世のものならば、世は己がものを愛するならん。汝らは世のものならず、我なんじらを世より選びたり。この故に世は汝らを憎む。人もし我を責めしならば、汝らをも責め、わが言を守りしならば、汝らの言をも守らん。すべて此等のことを我が名の故に汝らに為さん。それは我を遣わし給いし者を知らぬに因る」(ヨハネ15・18・21)

と主が語られた通りです。「まかれて磔地にありとは……」を註解して黒崎幸吉氏は、次のように述べられています。

「浅薄なる人物、軽信なる人、感情に動かされて強き意思を欠く人、粗忽にして深慮を欠く人は此の種類に属する。それゆえに、あまりに簡単に福音を受ける人は、必ずしも安心ができない」

と。どうもなかなか手厳しいですね。「これは困った、自分は磔地型かな」なんて思っただけだったり、落胆したりしないでくださいよ。

(3) 茨型——根は下ろしたのだけれど、気が多いものだから茨や雑草、つまり、さまざまの心労や惑わしのために、いつしか「神の国」がお留守になり希薄になってしまうタイプ。

「神と富とに兼ね仕うることをあたわず。二人の主に兼ねつかうことをあたわず」



(マタイ6・24)

「何を食^{くら}い、何を飲^{のみ}み、何を著^きんとて思い煩^{わづら}うな。……まず神の国と神の義とを求めよ」(マタイ6・31～33)

であります。また、

「マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により思い煩^{わづら}いて心労^{ころう}す。されど無くてならぬものは多からず。唯一つのみ。マリヤは善き方を選びたり。此は彼より奪^ううべからざるものなり」

であります。

決然と神の方に顔を向ける。はつきりとした態度が要求されます。その人の全存在的生き方の問題です。同じく黒崎註解は茨型を評して曰く、

「靈肉共に多くの欲望を有する人は此の種に属する。かかる人よりその茨を取り去る時、最も有望なる土壤となるけれども、茨は頑固に土壤に喰^くい入り容易に取り去ることができない。最もなやみ多き人である」

(4) 良き地型——黒崎註解によれば、

「その心は柔軟従順にして神の言を受くるに足り、その思いは深くして御言の根を深くおろさしめ、その心は純真にして此の世の慾の妨ぐるもの無き処こそ、神の言のまかるる良き地である。神の言を受けんとするものは、先ず之を受くべき良き地を耕さなければならない」

という。一応、まことにもつともであります。「どうもむずかしいことになってきた。到底及第しそうにない」と思われる方があてでしょう。

「路傍、磽地、茨地等の如く人間の性質は生まれながら備わり、これを變更し得ざるや、即ち、福音を受けて実を結び得る者は心に良き地を有する者のみなりや。もし然りとすれば、他の者の救いは如何になるべきか？」

と黒崎氏はこのように問いかけたのち、答えて曰く、

「心配無用である。何となれば神は時に大なる苦難を与えて堅き磽地を砕き、茨を焼き尽くし、これを良き地たらしめ給う。人生に於ける苦難は此の意味において神の賜物である」

と結んでおられます。黒崎氏は、「神の与え給う苦難」の中に解決を見出そうとされました。確かにこれは、人生における体験的真理であろうと思います。苦難がそのような積極的意義を担いいうること——内村鑑三のいう「暗きに見ゆる神の恵み」(求安録の句)、即ち神の恵みのひとつの現れ方であることは否定すべくありません。しかし、私は更に進んで、次のように言いたい。人間の側^{すがた}の相は、生来の人間の状態は、磽地といい、茨地といい、はたまた良き地というとも、それは相対的なものにすぎない。人間はみな五十歩百歩であつて、手放しで生来の「良き地」というもの、絶対性をもった「良き地」というものはありえない。



そういう人間の側の相対的善悪、正邪、浄不浄を乗り越えて、上より絶対無条件の恵みとして賜りたるもの、これがキリストの福音である。砕けえない磔地を砕いてくださっているもの、これぞ十字架におけるキリストの砕けである。十字架こそ、磔地を砕き、茨を焼きつくす愛の火である。我々はこのキリストにぶつかったとき——十字架のあがないという厳かな霊的現実の中へと吸い寄せられた時、磔地も茨も、もはや問題ではない。

「問題ではなくなつたよ。私がもうみんな解決したよ、あがないつくしたよ。さあ、安心してついておいで！」

と呼びかけていくのださるのが主の十字架であり、十字架の主キリストなのである。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや我生くるに非ず、キリスト(みたまのキリスト)が我の中に生き給うなり」

とは、キリストに砕かれた、磔地よりも固きパウロその人の告白にあらずや。

生来の我は、いつまでも付きまとうことであろう。けれども、もうそんなことはどうでもいい。心配無用、というのが十字架の恩寵の事態であり、実力あるみたまの現実である。この賜りたる新しき我、みたまにある我のみを問題にしてゆこう。みたまのみがほんものであり、絶対性をもつていくのださる。相対的な、それ自体ではどうにもならぬ我々の中へ、絶対次元の生命が宿った——恵みによりて宿った。これが福音なのだ。このようなキリストの御前に、私はひれ伏しの他、知らない。十字架は私を良き地としてしまった。そして、必ず実を結ぶ。神の国はわが衷^{うち}にあり！と誰もが感謝をもつて叫べるのです。

「人にできないことも神にはできる。神には能わざることなし」(マルコ

10・27) (富める青年との問答のあと、弟子に言われた言葉)

「凡て労する者、重荷を負う者、われに來れ。われ汝らを休ません」(マタイ

11・28)

キリストから離れて、手放して解決しようとするなかれ。キリストのふところの中こそ、いついかなるときにも、われらの住み家なれ。信仰とは何か、われらにとりては、キリストのふところにいるにいたかたであること。そこから、のこのこと抜け出さないこと。「の中に」ありさえすれば足る。キリスト(みたま)我を守り、我のためにいいがたき呻きもて執り成してありたもう。ハレルヤ。



「福音通信」第4号 ——喜び、喜べ！——

1973年3月11日

奥田昌道

「汝ら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ。凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ、主は近し。何事をも思い患うな、ただ事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝して汝らの求めを神に告げよ。さらば凡ての人の思いにすぐる神の平安は汝らの心と思いとをキリスト・イエスによりて守らん。」（ピ

リピ書4・4〜7）

「主にありて喜べ」とは、

「主を喜べ、主を汝の喜びとせよ」

ということですが。何を為していまして、どんな境遇におかれていまして、常に主キリストをあなたの喜びとしていなさい、ということです。キリスト者は、既に十字架において、この世に対して死に、世もまた我に対して十字架につけられ、その支配力を失っているのです（ガラテヤ書6・14）。十字架という霊的現実、力ある恩恵の場にしっかりと身を置いているかぎり、私達は上のパウロの言葉のとおり、いつも主を喜ぶことができます。そして、この喜びを奪うものはないのです。

現存のアメリカの婦人伝道者ベティ・バックスターの物語は、まことに感動的な自伝ですが、ベティは生まれながらにして不治の病を背負い、その幼少の頃から少女時代にかけて、激しい身体の痛みとたたかいつづけてきた人でした。

《生まれた時から脊椎骨が曲がっており、骨の一つ一つがその本来の位置から外れて、

互いにねじれもつれており、神経組織は破壊されていた》

ということですが。医師は完全に見放し、ただ痛みをやわらげるために麻酔剤を注射しつづけるのみでありました。そして、年とともにいよいよ激痛が増し加わり、彼女の生命をすりへらしていったのです。11才の頃のことを彼女は次のように書いています。

《父と母と主治医のほか誰の顔も見ない日が毎日毎日続きました。一体どの位続いたか勘定できないほど長い間続きました。この世から隔離されてさびしい毎日をねて暮らしていたその年月の間に、私は一つのことを発見しました。それはこいつことです。医師たちは愛する人を私たちから引き離すこともできる。友人をあなたの方のそばから連れ去ることもできる。しかし、イエスからは引き離すことはできない。なぜなら、イエスは約束されたからです。》



「私は決してお前たちから去って行きはしないし、決してお前たちを見棄てたりはしない」

と。ですから私が王の王なる主と親しくなったのは、それらのさびしい年月の間のことでした。……私が知っている唯一つのこと、それは、その苦痛と孤独の恐ろしい年月の間に本当にイエスを知ったのだということです。友よ、イエスは「谷間」に住んでいます。人生の心の谷間に。イエスは谷間の百合です。あなた方がイエスを探されるなら、その谷間で見出せるでしょう。影の中に立っているイエスに出会うでしょう。

母はいつも午前中に私を入浴させ、それから私の傍を離れて行くのが常でした。時々私は自分のベッドの傍を歩いている静かな足音を聞き、私がちよつとぼんやりしている間に母が部屋の中に入ってきたのかと怪しみました。それから、私は静かな声を聞き、その声を段々おぼえるようになりました。……それはイエスが私に話しかけておられるのでした。最初にこの事が起こった時、イエスは私の名前を三度、大変やさしく呼ばれたのでした。

「ベティー! ベティー! ベティー!」

私は云いました。

「ああ、主よ、暫くの間ここにいて、私とお話してください。私はとても淋しいのです」
イエスは沢山のことを言われましたが、私の忘れられないことが一つあります。イエスがいつもこのことを言われたわけは、この言葉を聞くと、私が一番感動することを知っておられたからだと思います。イエスがいつも言われた言葉はこうでした。

「ベティ、お前を愛している!」

みにくくねじれ曲がったあわれな状態の私をイエスはいつも暖かい眼で見おろされたものでした。私は父が立たせてくれた時でさえ、四つになる弟と同じ位しか背丈がなかったのです。大きなコブが沢山、私の脊椎骨の上にできあがっていて、最初のは首のつけ根に、それからそれから次々と脊椎骨の末端に至るまで続いていました。腕は肩から手首まで麻痺しており、やっと指が動かすだけでした。頭はねじ曲げられて胸にくっついていました。水を飲む時は、頭を起こすことができないので、管を使わねばなりませんでした。しかし、こんな状態において、イエスは私を愛していると言われたのです。私は云いました。

「イエス様、私が忍耐するようお力添えくださいまし。あなたが私を愛していると知る限り、私はどんなこともできるのですから!」

幾度も幾度もイエスはささやかれました。

「おぼえておおき、ベティ。私は決してお前を置きざりにしたり、見棄てたりしないのだよ」

皆さん! 私は自分がこの世のすべてから忘れ去られた醜い不具であった時でも、



こうして癒されて丈夫になり、イエスの為に働けるようになった今と全く同じように、イエスは愛してくださっていたことを確信しています。イエスが私の傍に立っていらっしやる時、私はよくこんなふうにお願ひしたのを覚えています。

「イエス様、私が苦しんでも、先生がモルヒネを注射してくださらないのを御存知ですか？ 背中のコブのある所がどんなに鋭く痛むのかをあなたは御存知なのでしょうか？」

すると、イエスは言われるのです。

「ベティよ、知っているとも。お前はおぼえていないのかい？ 天と地の間に懸けられたその日に（父の御計画によって救いの成された日に）、私はこの世のすべての苦しみと疾病^{やまい}とを自分の上に背負ったのだよ」……」

このようなことがあってから後、ベティの病状はいよいよ悪化し、しばしば死線をさまよいます。暗い暗い谷間をひとり歩まされていた時、突然パツとその場が昼間のように明るくなり、何か強いしつかりしたものが彼女の手をとっているのを感じました。それはイエスの手でありました。彼女は肉体的には完全に意識を失ってしまっている間に、霊界を歩んでいたのです。そして、イエス様から、きつと秋には癒してあげようとの御約束をいただきます。8月の半ばの暑いある日、彼女はイエス様から彼女の身体を癒していただく日時をはつきりと告げられます。祈り深いベティの母にも、同じ日時が告げられました。その約束の日の前日からのことを彼女は次のように記しています。

《土曜日、8月23日になりました。母は私の傍^{そば}に居れるように、いつも私の部屋で寝るのです。その夜も、母が私をすっかり寝具で包んでくれると、私は眠りに落ちました。夜、時々私はねむりよりさめました。明るい月が窓越しにベッドの足の所までさし込んでいました。私は、月の光の中で両腕を高くあげ、ひざまずいている姿を見ました。それは母でした。涙がほとばしるように母の顔を流れていました。母は祈っていたのです。

「主イエスよ、私はベティのよい母であらうと努めてきました。私はあなたの事をベティに教えようと熱心に努めてきました。イエス様、今まで私はあの子から離れたことがありません。けれど、あなたがベティを癒されたら、あなたが望まれる所ならどこへでも、私はあの子を行かせるつもりです。たとえ、嵐の海を超えてでも。なぜなら、あなたは明日、ベティのためにあなた以外、何者もなし得ぬことをしてくださるからです。イエス様、あの子はあなたのものです。ああ、明日こそその日です。あなたはあの子を解き放ってくださいませぬ。そつですぬ、イエス様！」

私はまた眠りに落ちました。私は眼をさまして祈りつつけることができませんでしたが、しかし、母が私に代わって祈ってくれたのです。私が今日、神を信じているのも、からだが癒されることができたのも、母の信仰のおかげです。



日曜日の午後3時15分前に、母が私のベッドの傍へ来ました。母は私を連れて行って、折れ曲がったからだを椅子に座らせ、枕でささえてくれました。私は言いました。

「お祈りを始めてちょうだい。イエス様がいらつしゃった時、お祈りをしていたいの」私は意識を失っていませんでしたが、神の聖霊に捕えられていました。……私は突然大きくて羊毛のように白い雲の形を見ました。その時、雲の中からイエスが歩み出て来られました。それは幻ではありませんでした。夢でもありませんでした。私はイエスを見たのです。ゆっくりと私の方へ歩いて来られる時に、私はイエス様の顔を見ました。イエスについて一番著しいものはその御眼です。……私はその御眼を決して忘れません。疲れている時に、イエスの為に何かするように求められると、私はしばしばいやだと言いたくなります。しかし、イエスの御眼を思い出す時、その御眼は私に、収穫の畑へ出て行って、もっと多くの魂を救え（滅び去る魂を導き獲得せよ）と命ずるのです。イエスは両手を私の方に差し伸べながら、ゆっくりと近づいてこられました。私はその御手にみにくい釘の痕を認めました。イエスが近づけば近づくほど、私は気分が良くなりました。

とうとう私の処までイエスが来られた時、私は自分が大変小さくて無価値なものだという事を感じ始めました。私は何ものでもない。ただ、不具のみにくい、忘れられた小さな女の子にすぎないのだと。しかしその時、突然イエス様が私にほえみかけられました。私はもう何も恐れなくなりました。イエスの御眼が私の眼を捕えました。美と同情にあふれた眼とは、まさにこの眼のことです。イエス様のような眼を持った人は、私の知っている限り、そう多くはありません。もし愛と同情にあふれた眼の人に会ったら、私はその人のそばにずっと一緒にいたいと思います。それがイエスについて私が感じたことです。

イエスはそば近くに來られて、私の椅子の横に立たれました。御衣の一部はゆったりと椅子の内側までたれ込んでいました。私はそれまで、イエスが私を癒しに來られたら、イエスに話しかけ、癒してくださるようお願いしようと思っていました。しかし、その時になると一言も口が利けませんでした。私はただイエスを見、その愛し奉る御顔から眼をそらさずに、私がどんなにイエスを必要としているかをわかって頂こうとしていただけでした。イエスは腰をかがめ、私の顔を見上げるようにしてやさしく話されました。イエスは大変やさしく言われました。

「ベティ、お前は忍耐づよく、やさしく、愛情深かった」

この言葉を語っておられる時、私はもしもう一度イエスにお会いできて、その御声を聞くことができるなら、もう15年苦しんでも構いはしないと思いました。イエスは言われました。

「私はお前に健康と喜びと幸福を与える約束をしよう」



イエスが手を伸ばされるのを見て、私は待ちました。それから、イエスの御手が背骨の上のコブを撫でたのを感じました。イエスは私の背骨のちょうど真ん中、大きなコブの一つの上に御手を置かれました。すると突然、火のような熱い感じの大波のような何かがからだ中に広がりました。二つの熱い手が私の心臓をつかんで握り締めました。そして、その熱い両手が私の心臓を放した時、私は正常に呼吸ができるようになります。生まれて初めて私の心臓が正常な状態になったのだという事を知りました。二つの熱い手は胃の上をさすりました。そして、私は器官の疾患が癒されたこと、もう新しい腎臓も不要だし、イエスが癒し給うたが故に、自ら食物を消化することもできるのだという事を知りました。熱い感じは引き続き、私の体中を駆けめぐりました。私はイエスが私の身体の内部を癒し給うただけなのだろうかといエスの御顔を見ました。するとイエスにはにっこり笑われて、御手で私のコブをおさえてくださるのが感じられました。そしてその御手が背骨の真ん中をおさえた時、まるで電流の通っている電線に触れた時のような激しい感覚がするのです。私がこの電流のような感覚を感じるや否や（ちょうど今夜このお話をしているように）、まっすぐ自分の足で立ったのです。内も外も癒され、からだのすみずみまで完全に健康になし給ったのです。イエスは私の為に、この地上ではどんな医者もなし得なかった事をまたたく間にし給いました。

あなた方は言います。「ベティ、椅子からとび上った時、どんな感じがしましたか」と。あなた方が世に捨てられた絶望的不具に一度なってみない限り、その気持ちはおわかりになりますまい。何の希望もなく、椅子に座っている経験をお持ちにならねば、それは決しておわかりにならないでしょう。

私は母に走り寄って言いました。

「お母さん、触ってみて、コブはなくなった」

母は上から下へと背骨を触ってみました。そして言いました。

「ああ、なくなりました。私は、骨がパチン、ポチンと鳴るのを聞きました。ベティ、お前は癒された。イエスをあがめましょう！」

私は振り向いて、今まで座っていた椅子を見ました。涙がほほを伝わりました。あんなにいつもいつも苦しんでいたのに、……ほんとうに毎日苦しんでいたのに……。もう何の痛みもなくなっていました。私はからだがすっかり軽くなったように感じました。そしてまた、私は自分の背がとても高いように感じました。なぜなら、頭が胸にくっついていて、殆ど二つ折りのようになっていたのに、コブが無くなって背中がまっすぐになったからです。

私はあたりを眺め、椅子の前につっ立っている幼い弟を見つけました。その可愛いほほに大きな涙の粒が流れていました。弟は私を見上げて言いました。

「僕は、お姉ちゃんが大きな椅子からとび出したのを見たよ。僕は、イエス様が姉さ



んを癒してくださったのを見たよ」

私は本当に感動していました。私は椅子を拾い上げ、頭の上にさしあげて言いました。

「見てください！ 私がお仕えしている神様がどんな事をなし給ったかを！」

弟のちょうど後にイエスはまだ立っておられました。私はシャンとのびた正常なからだでした。眼と眼を見合せながら、イエスはゆっくりと語り始められました。

「ベティ、私はお前に、癒されたいという願いをかなえてあげた。お前は正常で元気になった。お前は今や健康を得た。私が癒してあげたので、お前はもう完全によくなっているよ」

ちょっと息をついでから、イエスは鋭い目付きで私を見、権威ある美しい声ではっきりと言われました。

「覚えておきなさい。毎日雲をながめ、じっと見つめるのです。雲に乗ってやって来る私を。この次にお前が見る時には、私はお前をここに残しておきほしくない。永遠に私と共に居らせる為に連れて行くのです。」

友よ、イエスは再び来たり給いつつあるのです。》（終り）

〔註：『谷間の友』——主にまみえしベティ・バックスターの奇蹟、他三篇。長柴忠一著訳、昭和45年1月、月刊「キリストの愛」者発行〕

ベティの物語の紹介がずいぶん長くなってしまいました。けれども、右の物語は全く感動的な物語です。私はベティさんのように生々しく主イエス・キリストにお会いするといった体験はもち合わせてはいませんが、右のベティさんのお話はまことに全部そのとおり、アーメン、ハレルヤ！とお受けすることができます。そして、我らの主イエス・キリストは——みたまの主キリストは——ベティを憐み給うた。いつくしみ深い、同じ主様であります。ベティに語られたように、

「天と地の間に懸けられたその日に、私はこの世のすべての苦しみと疾病やまいとを自分の上に背負ったのだよ」

とおっしゃる主様を瞑想いたしますとき、この世の一切の相対的な問題はもはや問題ではなくなってしまう思いがいたします。この地上でのどんな苦しみも、また、不合理も、この十字架における主イエス・キリストの負われた苦しみ、不条理の前には、とげを抜き去られ、力を失い、口をつぐんでしまう思いがいたします。そして、私達の根源的在り方は、この主様と堅く結び合わされ、この主様の賜う生命に生きること、

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」

というパウロの現実が我らの生々しい現実となることをこそお願いいたします。愛する兄弟姉妹たちよ！どうか、もう一度、冒頭のピリピ書4章の聖句を味わってください。何と力強く、慰めに満ちていることでしょう。



「主を喜べ、主を喜べ、主はそば近くに在すぞ。主に祈れ、主に祈れ、何事も。主は君達の祈りを待ち構えて、待つていてくださる。主の前にいい格好をすることなんか何もいらぬ。あるがまま、分裂なら分裂のまま、苦しみなら苦しんでいゝるそのまんまの自分を、主様の御ふところへ投げ入れるのだよ。事ごとに祈りをなし、願いをなし、感謝して求めを告げなさい。きつときつと、言い知れない平安がやつてくるから」

こんなふうに響いてまいります。主様にいだかれてゐるからこそ、祈れるのです。主様の中にあるからこそ、いつも喜び、喜ぶことができるのです。主様のふところの中に安らうこと、これが一切の秘訣です。私達はみな、何者でもありません。

「主様、私は何者でもありません。また、自分の力で何かをしようとも思いません。どうか主様、あなたが私の中に100%お入りくださいまして、あなたが御業をなさってください。私の業ではなく、あなたの御業が成つて行きますように」

これが私の祈りです。

2月のある日、天理市の弘野慶次郎兄から、次のようなお便りをいただきました（弘野兄は天理の病院で外科医として勤務しておられます）。

「神が生きて私を愛してゐ給う。そのすばらしさは、主と私とにしかわからない。私にとつて生きがいとは信仰以外に考えられないから、はつきりそれを言明して、仕事やその他は二の次だと言つたら、不思議がられたり、ほめられたりします。ああ、このよろこびを誰が奪い取ることが出来ましょう。何故生きてゐるのか、むなししい気持ちで一杯だとか思つてゐる人は多いので、ひよつとして私に気づいてくれる人があつたら、私は神を告白しましょう。賢い思ひや、りきみは少しも必要ではない。今、神は私を四方八方より抱き給う！」

愛する兄弟たちのお一人お一人がこの弘野兄の告白にあるように、主様の愛に目覚め、喜び喜びでこの人生の旅路を歩み抜いてくださるように、賜りたる天職に祈りをもつて打ち込んでいつてくださるようにと、心から願い祈つてゐます。

「体は一つ、御霊は一つ、汝らが召しにかかわる望みも一つ。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの内に在したもう。我らはキリストの賜物の量に随いて、おのおの恩恵を賜りたり」（エペソ書4・4〜7）

アーメン、ハレルヤ。



「福音通信」第5号 ——我を食い、我を飲め！——

1973年3月18日

奥田昌道

春がもう戸口まで来ているこの頃ですが、ここ二、三日寒さの厳しい日が続きました。今朝は比叡山はうつすら雪化粧。外は冷たく、時として雪雲がおおいます。ストーブの暖かい部屋の中で、今朝も聖名を食い、みたまに祈りを助けられて、実に深い恵まれた集会をもたせていただきました。集会の恵みの余韻のただよっている中で、筆をとりました。

司会者（N兄）の選り読まれた聖句は、ヨハネ伝5章1～18節。エルサレムにある羊門のほとり、ベテスダの池の傍らに横たわる、38年間病苦になやむ人のおはなしです。

「エルサレムにある羊門のほとりにベテスダという池あり。これにそいて五つの廊あり。その内に病める者・盲人・跛者・^{あしなえ}瘦せ衰えたる者ども、おびただしく臥したり。（水の動くを待てるなり。それは御使のおりおり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち、最先に池にいる者は如何なる病にても癒ゆるなり）。ここに38年、病になやむ人ありしが、イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』と言ひ給えば、病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入る者なし。我が往くほどに他の人、さきだち下るなり』イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。』

38年間、病に苦しみつづけて来たこの人。いつの頃からか、この池のほとりへやって来た。そして、水の動くとき、最先に水に入ると癒されるという。今度は、今度は、と望みをかけるけれども、いつも、他人に先を越されてしまつて、どうすることもできない。誰かが自分を憐れんで手を貸してくれるかと思つても、誰も自分のことを構つてはくれない。全く忘れられ、棄てられた存在！ こんな自分に近づき声をかけてくれた人があつた。その人が誰なるかも知らなかつた。しかし、その人は慈愛と同情にみちた眼差しで自分に呼びかけ、自分の言ひ得ぬ苦しみを聞いてくださった。

「なんじ癒えんことを願うか」

この短い言の中に無限無量のものがこめられている。

「はい、主様、（ええ、旦那、というくらいの意味でしょう）誰も私のことを助

けてくれる者がないのです」

この人はどんなにか孤独で無力で、わびしかつたことでしょう。そういうやりきれなさが、その答えにこめられています。38年間病苦になやみつづけたこの人と、イエス様との問答



をみていますと、私はこの「福音通信」の前号(第4号)で書きましたベティさんのことを思います。あの孤独で淋しかった闇黒の日々の中で、彼女はイエス・キリストにめぐり会うことができたということ。イエスは人生の谷間に咲く白百合であるということ。苦難、孤独、失意というどん底にあるとき、そこに一緒に立つて重荷を、痛みを共にしてくださるお方。慈愛と慰めにみちたお方。これがイエス様です。

「おぼえておおき、ベティ。私は決してお前を置きざりにしたり、見棄てたりしないのだよ」

と、幾度も幾度もベティに語りかけ、力づけられたイエス様。ベティは、

「どうぞ、私が忍耐するようお力添えくださいまし。あなたが私を愛していらつし

やると知る限り、私はどんなことでもできるのですから！」

と答えています。

私達は愛に飢え渴いています。私達の魂が求める愛は、イエス様のような愛です。イエス様にほんとうに出会うことができたなら、私達の人生は一変してしまいます。たとい、外的状況はちつとも変わらずとも、そんなことはもうどうだってよくなってしまうのです。ほんとうの愛がほしい。ほんとうの愛に出会いたい！私達の魂の内なる声はこう叫んでいます。私達の魂はほんものにぶつかるまでは、どうにもならないように造られているのです。

「我、神のうちに憩うまでは、我が魂、安きを得じ」

とは、アウグスティヌスの言です。私にとつては、愛とはイエス・キリスト御自身であります。イエス・キリストが在し給うという、そのことで十分であります。一体、何をもつてこの方と代えることができるか！

福音書を読んでいまして著しいことは、イエスに出会い、あるいは、イエスに出会われ、関わりをもつていただいた人達は、ほとんど例外なく、行き詰まりの、どん詰まりの極限状況にある人達ばかりだということです。なりふりかまわず、あるがままの己れの姿をそこにぶちまけて、「主様、助けてください！」と叫んでいる魂ばかりです。SOSを発信している人達ばかりです。たとえば、マルコ伝5章、異邦ゲラセネ人の地にて墓場にくさりでつながれた人——レギオンといって軍団をなしてこの人の中に住みついた悪霊どもがこの人を苦しめ、

「夜も昼も絶えず墓あるいは山にて叫び、己が身を石にて傷つけたり」

とあるように、自分でもどうしようもない、ある力に蹂躪され、翻弄されて苦しんでいる人。また、

「わが稚き娘、いまはの際なり。来りて手をおき給え、さらば救われて活くべし」

と必死になってイエスをお願いしている会堂司やイロ。十二年血漏を患って、

「多くの医者に多く苦しめられ、有てる物をことごとく費やしたれど、何の効



なく、かえってますます悪しくなりたり」

という女の人（旧約聖書では、血漏はけがれとみなされ、みだりに人の中に出入りすること、いわんや神の聖前に出ることは禁じられていたということです）。この女の人の絶望感、孤独感はどうなかに深いことだったでしょう。医者は苦しみ、宗教家は戒律をもつて縛るのみ。一体、誰のところへ行けばいいのだろうと。そんなときに、イエス様のことを伝え聞いて、無我夢中でイエス様のところへ来たのです。そして、

「御衣のふきにだに触らば救われん」

と心に祈り、自らにいいきかせながら、切なる思いで御衣に触ったのでした。そのほか、数えあげればきりがなくいろいろです。私は、レギオンに苦しめられたる人の話を読めば、自分自身がその人になり、ヤイロの娘の話では、自分がヤイロになる。十二年間血漏を患う女のお話では、自分がその女になってイエス様に出会うのです。イエスの御声を体いっぱいでお受けするのです。体中に貫くジーンとした思いがあります。瞑目し手を合わせ、イエス様に祈ります。イエス様と私とただ二人つぎりのみ、という堅い堅い結合の場がそこに成るまで深く祈るのです（たとえば時間はごく短くとも）。福音書のイエスの御言葉は、なんと慈愛にみちた慰め深い御言として響いてくることでしょう。

「我に居れ、我が愛に居れ」

これが主の御思いです。この御言にしつかりととどまっています。いつも、主の幼な子として。

*

福音講筈は、今日はマルコ伝6章30節からです。イエスの按手を受け、穢れし霊を制する権威をいただいて福音伝道に出掛け、イエスの御名によって力ある業を為しおえて、十二弟子達が御許へと帰って参りました。

「その為ししこと、教えし事をことごとく告ぐ。」

弟子達は疲れながらも、どんなに心がはずんでいたことでしょう。

「イエス言い給う『なんじら人を避け、寂しき処にいざ来りて暫し息え』これは往来の人をおくして、食する暇だになかりし故なり。」

イエスは弟子達の労をねぎらいながら、しばらく寂しき処で安らうようにと仰せになりました。「食する暇だになかりし故なり」という叙述にぶつかりますと、直ちに思い出しますのは、あの讃美歌121番「まぶねの中に」です。その2節に、

「食するひまもうち忘れて、しいたげられしひとを訪ね、友なきものの友となりて、
こころくだきしこの人を見よ」

とあるごとく、全くイエスの一日一日は己れを与えてやまぬ愛労の貫きでありました。



「斯^{かく}て人を避け、舟にて寂しき処にゆく。」

ところが、案に相違して、多くの人々がそれと知り、

「その処を指して、町々より徒歩にてともに走り、彼らよりも先に往けり。」

先回りして目的の場所へ行つてしまった。

「イエス出でて、大いなる群衆を見、その牧^かう者なき羊の如くなるを甚^{いた}く憫^{あわれ}みて多くの事を教えはじめ給う。」

やむにやまれぬイエスのひたむきな愛と憫み、先ほどの讃美歌の通りのお姿です。イエス様はいつもこのようなのです。いわゆる予定や計画といったものは、どこかに吹っ飛んでしまうような。サマリヤの女との対話もそうでした（ヨハネ伝4章）。サマリヤのスカルという町で

「此^こ処にヤコブの泉あり。イエス旅路に疲れて泉の傍^{かたわ}らに坐し給う。時は第6時頃（正午）なりき。サマリヤの或^{ある}女、水を汲まんとて来りたれば、イエス之に『われに飲ませよ』と言いたもう。弟子たちは食物を買わんとて町にゆきしなり。」

ところが、この女と問答をなさっているうちに、イエスは御自分の疲れも渴きも忘れはてて、真剣に神の国のこと、永遠の生命のこと等を語り出された。

「すべて此の（井戸の）水を飲む者はまた渴かん。然れど我が与うる水を飲む者は、永遠に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし」

「神は霊なれば、拝する者も霊と真^{まじ}とをもて拝すべきなり」

「なんじと語る我はそれ（キリストと称うるメシヤ）なり」

矢継ぎ早に、重大な真理が次々と語り出されました。食物を買って帰ってきた弟子たちは、あつけにとられて見ていました。女が町へと駈け出して行つたとき、漸^{ようや}く弟子達は「どうぞお食ください」と食物を差し出しました。

「イエス言い給う、『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』。弟子たち互にいう『たれか食する物を持ち来りしか』。イエス言い給う『われを遣わし給える者の聖言^{みことば}を行い、その御業^{みわざ}をなし遂ぐるは是れわが食物なり。……』」

このような自由自在なイエスの在り方に弟子達は、しばしば面くらひ、戸惑ひ、時には憤慨もし、つまずき、つぶやいたことでしょう。昨夜読んだばかりですが、『南原繁著作集』第6巻の中の「内村鑑三先生」という一文があります。大変、感銘を受けましたが、その中に次のような文章があります。

《先生（内村先生のこと）が一個の人としても偉大であられただけに、その御性格には、われわれ凡俗の者をもつてしては理解し得られない多くの点があったことは事実である。あるいは数多くある弟子のうちの誰一人も、その最も近くにいた人々すら、先生



を真の相において把握し得たものはなかったのかも知れぬ。この意味においても先生は「孤独の人」であられた。しかるに私は思つ。先生の核心を把握した者は多分、小児、幼な子のごときであつたであらうと。子供のような純真な心を持った者のみが、先生のハートを完全に掴み得たのではなからうか。先生御自身がいかに幼な子を愛せられたか。……先生自らがきわめて「純真の人」「正直の人」であられた。言葉は適當を欠くかも知れぬけれども、先生は一個の人としては「坊ちゃん」――「偉大な坊ちゃん」であるかのごとく感じられた。かような人には往々一徹もあり得んも、単純と無邪気と率直はおよそその人の特質である。……およそ先生のなされることに、世のいわゆる計画と称するがごときものはなかった。合目的・合法則的の考えは、およそ先生から遠いものであつた。カントは天才を論じて「自然のごとく動くところのその人である」と言つたが、内村先生は実に小児――偉大な小児の自然のごとく動いた人である。彼も「天才の人」であつた》(第6巻76〜77頁)

要は、小ざかしい人間の(大人の)合理・打算、思慮・分別ではなく、超合理・超打算、超分別の自由自在な生き方、動き方をなさつたということであらう。いかにも内村先生らしいと思うし、また、よく内村先生の特質をつかみ表しておられると思う。イエスはまさに偉大なる幼な子、天与の靈法に則つて歩いておられた。実に千変万化すといえども、ここに父の御旨が貫いていた。私心なき人、完全に己れを父なる神に明け渡した人にして、はじめて自由自在、無限無量なる在り方が展開した。

幼な子の在り方とは、分裂なき全的な在り方、遊びにせよ何にせよ、無心に熱中没頭、他の一切を忘れてしまうようなひたむきさ、体当たりの、全身的な在り方です。マルコ伝へ戻りますと、せっかく休息をと仰つていただいたのに、事実は正反対、またまたえらく熱心に夢中になつてイエスは群衆に語りつづけてやまれませんでした。弟子達はどうとう

「もうこの辺でおよしになつてはいかがですか。お腹も空いているでしょうし。」

もう解散といたしましょう」

とイエスに提言いたします。それに対してイエスは、

「君達、そんなに食物のことが気にかかるなら、君達が食物を与えるがよい」

と、いささか突き放したような返事をなさいました。

靈の糧にみたされて、天国の饗宴をそこに展開し、語る者も聴く者も一つになつて、その現実生き、食ひ、呼吸している。この主イエスと群衆たち――それに対して、

「それはそうだけれども、やはり食物のことも心配しなければ」

と、思慮分別を働かせて、それに水を差してしまった弟子達。いや、これは他人事ではありません。私達だつてしょっちゅう、こういうことを繰り返しているのです。

小池先生はよく、夏の特別集会のときなど、午前の集会でみたまにみたれ熱して語り出されますと、



「お昼の食事なんて無きやいいのにね。皆さん、みたまの糧をいただいたら、昼御飯のことなんか忘れてしまおうでしょう。人間、ときにはそのくらい打ち込まなくてはダメですよ」

とおっしゃったことがある。私の脳裏に鮮やかに焼きついている小池先生のイメージ、先生の語られた御言葉の一つ一つは、先生はとにかく「全的」であるということ、右に書いてきた「幼な子の魂」であり、キリストに祈られるとき、集会で語られるとき、集会にのぞむ気構えを会員にさとされるとき、いつもこの「全人的」であり、「全人的であれよ」と迫られるのである。集会にのぞむに棄身で来いよ、とおっしゃる。実に激しい。「それでも」と弁解したくなることもある。しかし、問題は先生に弁解するのではなく、主様に対して私達が真に棄て身で立ち向かっているか。前に「SOS」のことを書いたが、ほんとうに「SOS」の姿の自己に気付き、体当たりに主様に叫び、求めているか。それが問われているのである。イエスの愛は白熱の愛である。天国のことを語り、天国の現実を与えたもうイエスは、また、我らのパンことをも配慮したもう。弟子達は自分の思いで、パンのことを配慮せんといたしました、これは出すぎたことであつたようです。

「イエス言い給う『パン幾つあるか、往きて見よ』。彼らいう『五つ、また魚二つあり』。イエス凡ての人の組々となりて、青草の上に坐することを命じ給えば、或は百人、あるいは五十人、敵のごとく列びて坐す。斯てイエス五つのパンと二つの魚とを取り、天を仰ぎて祝しパンをさき、弟子たちにわたして人々の前に置かしめ、二つの魚をも人毎に分け給う。凡ての人、食いて飽きたれば、パンの余り、魚の残りを集めしに、十二の筐に満ちたり。パンを食いたる男は五千人なりき。」

あり合わせの普通の五つのパン、また、同じくあり合わせの魚二つ——この何でもない、ごく僅かな有限なる食物をイエスは実に、無限食、無量食となし給うた。この有限なるパンを手にし、「天を仰ぎて祝し」とあります。イエスが祈りたもうところ、イエスの祈りがかかってくるころ、そこには有限なるものの中に無限無量なるものが宿り、展開してくのです。異質なるもの、異次元なるものが宿り、光るのです。よく、小池先生が、

「瞬間において永遠を掴んだ人こそがほんとうに生きた人である」

といったことをおっしゃいました。過ぎゆくもの、一時的なるもの、朽ちるものの中に、過ぎゆかざるもの、永遠なるもの、不朽なるものを宿すか宿さないか、に人生はかかっています。この永遠なるものとは、イエス・キリストのみたまのいのちであります。

「これを実は、お前達に与えるために、私は世に来たのだよ」
とおっしゃるのです。

「見ゆるパンではないよ。五つのパンが五千人分のパンになったという見ゆる現象ではないよ。この裂かれしパンは、実は私自身だ。裂かれ砕かれて、無限無量の



いのちを、肉のいのちとは異なる永遠の生命を、お前達に与えようとしているのだよ」

と語りかけておられるのです。ヨハネ伝6章を開いてみますと、このことがよくわかります。22節から、どうぞお読みください。

26〜27節、32〜40節、43〜51節、53〜58節と、たたみかけるように、波状的にイエスは語り給います。

「我は天よりのパンなり。神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり」
「われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも渴くことなからん。……それわが天より降りしは、我が意をなさん為にあらず。我を遣わし給いし者の御意をなさん為なり。我を遣わし給いし者の御意は、すべて我に賜いしをも、我その一つをも失わずして終の日に甦えらする是なり。わが父の御意は、すべて子を信する者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦えらすべし」

「我は天より降りし活けるパンなり。人このパンを食わば永遠に活くべし。我が与うるパンは我が肉なり。世の生命のために之を与えん」

「わが肉をくらい、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ。……わが肉をくらい、わが血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。活ける父の、我をつかわし、我の父によりて活くるごとく、我をくらう者も我によりて活くべし。……我をくらう者は永遠に活きん。」

永遠の生命者イエスは、私達を御自分と同質、同生命以下には置きたまわらない。同じ永遠の生命者、永遠の生命体に化せずばやまじとの御本願をもつて、我らに迫りたもう。

「我を食い、我を飲め！」

と。ハレルヤ！ この上よりの御本願あればこそ、私達も永遠の生命を現にいただいて、喜び勇んで進むのみ！

